

# 宮古島殺人事件

広田弦一

池間島は以前、宮古島とは陸続きではなく、宮古島から池間島に行くには、船を利用するしかなかった。それが、1992年に池間島と宮古島を結ぶ全長1425メートルの池間大橋が建設され、宮古島から池間島へ車で行けるようになった。その結果、池間島は一気に観光客にとって身近な島へと変貌を遂げ、今では宮古島を訪れる多くの観光客が池間島へも足を運ぶようになったのだ。

そんな池間島は宮古島の北部に位置し、その島の北東5キロから12キロには、八重干瀬と呼ばれる海域があり、沖縄屈指のサンゴ礁が見られる絶好のダイビングスポットとして名高い。また、池間島は元来、二つの島であったが、埋め立てにより、池間島という一つの島となった。埋め立ての名残は、池間島の中央辺りに位置している湿原から見る事が出来る。

そんな池間島の海の美しさは、見る者の眼を奪う。宮古島が沖縄随一の海の美しさを見せるのは、宮古島には川がなく、その為赤土が海に流れ込まない為だそうだが、その説明は池間島にも当てはまる。一度、池間島を訪れて見れば、その海の美しさを大いに実感出来るだろう。

そんな宮古島ではあるが、ダイビングや遊泳目的で宮古島を訪れる観光客はまず、宮古島でダイビングや遊泳を行うことであろう。何しろ、宮古島には有名なビーチが存在してるからだ。

それに対して、池間島には然程有名なビーチが存在してるわけではない。それ故、池間島のビーチは、穴場的存在といえるだろう。

そう思った滝川孝之は、大阪からの旅行者だ。滝川は今、二十五歳であったが、就職浪人中であり、時間は余裕があった。それで、今まで一度も訪れたことのない宮古島を訪れてみようと思ひ、昨日一人で宮古島にやって来た。

そんな滝川の移動手段は、無論レンタカーだ。空港で軽自動車を借り、昨日、東平安名崎に行き、そして、今日は昨日行けなかった西平安名崎と池間島に行ってみようと思っていた。

宿泊先のホテルを後にしたのは、午前八時であった。そして、まず砂山ビーチに行き、それから、西平安名崎に行った。

そして、西平安名崎の展望台から、辺りの風景を堪能し、それから、池間島に向かった。

もっとも、西平安名崎から池間島へは、目と鼻の先であった。

また、今日は雲一つない程の晴天であり、また、ウィークディであった為かどうかは分からないが、渋滞とは全く無縁のドライブで、この調子だと、池間島観光を十分に愉しめるだろうと滝川は思ひ、池間大橋に向かったが、その入り口付近とか橋の中で度々車を止めざるを得なかった。

というのは、その宮古ブルーと形容される海の美しさに眼を奪われたからだ。その海の色は、正に自然が作り出した最高クラスの芸術作品だと思ってしまうのだ。

そんな浮かれた気分で、池間島観光に乗り出したのだが、その途中、港とか、xxビーチとかいう看板が出ているスポットには逐一立ち寄り、車外に出ては、辺りの光景を眼に焼き付けた。

そのようにして、池間島観光を行っていたのだが、やがて、駐車場も完備され、しかも、トイレも備えられているビーチに立ち寄ることにした。

その駐車場には、かなりの車を停めることが出来、池間島ではかなり大きなビーチに思われたが、今、その駐車場には一台も車が停められてはいなかった。

というのは、まだ、朝の九時を少し過ぎたばかりだからだと、滝川は思っていた。

それはともかく、池間島のビーチとしては、かなり大きなビーチと思われるそのビーチを早速見物してみることにした。

車外に出ては、駐車場からビーチへと踏み出した。ビーチへは、少し下り坂になっていたが、その下り坂を少し降りるとビーチに出た。

車が一台も停まっていなかったことからして、当然ビーチで泳いでる人やシュノーケルなどをしてる人は見られなかった。

今、十月の半ばといえども、少し歩けば汗ばむ位であり、当然宮古地方ではまだまだ泳げる季節であった。昨日訪れたビーチでは、泳いでる人やシュノーケルに興じてる人がいたが、それは、この陽気からして、当然のことと思われた。

それはともかく、滝川は水着を持ってこなかったのが、残念であった。この今、誰もいない波穏やかなビーチを目の当たりにして、泳がないのは、もったいないという思いが過ぎったからだ。

しかし、泳ぐとなれば、一人では危険だろう。

そう観光案内のパンフレットには説明されていた。一人で泳ぐとなれば、もし事故に遭った時に何かと面倒な事態が発生するからだ。それ故、泳ぐとなれば、仲間を連れて来なければならないだろう。

そう思っていた滝川は、まだしばらくの間、誰もいない宮古ブルーと形容される海に眼をやっていたのだが、その時、滝川表情が突如、険しくなった。何故なら、滝川はとんでもないものを眼に留めてしまったからだ。

それは人間だ。まだ、若いと思われる女性が、衣服を身に付けたまま、波打ち際をぷかぷか浮いているのを眼にしたからだ。あれは、絶対に人形ではない！

そう察知したといえども、滝川一人でその死体を陸揚げするには、やはり抵抗があった。

それで、滝川は直ちに携帯電話で110番通報したのだ。

滝川からの通報を受けて、宮古島署の警官が現場に着くのに然程時間は掛からなかった。というのは、辺りをパトロールしていた警官がいたからだ。

そして、その警官、即ち、仲本正志（29）は波上に漂う女性の遺体を確認すると、制服を脱ぎ捨て、波の中に入って行った。もたもたしていれば、その女性の遺体は沖に流されてしまうかもしれないからだ。

そして、程なく仲本は女性の遺体に行き着き、女性の遺体を抱えるようにしては陸揚げすることに成功した。

その女性は、赤のワンピース姿であった。その赤のワンピースという派手な色であったことが、滝川の眼に留まったのであろう。これが、地味な色とか、海の色と同じような衣服であつたら

、滝川の眼に留まらなかったかもしれない。

それはともかく、仲本によって陸揚げされた女性は、まだ二十代と思われた。また、まだ死後然程時間が経過してないと思われた。また、なかなかの美人であった。

何故このような女性が、このような変わり果てた姿で発見されたのだろうか？ そう仲本も滝川も思わざるを得なかった。

それはともかく、池間島のフナクスビーチで変死体で発見された若い女性の死体は、その日の内に身元が明らかになった。何故なら、その女性と思われる問い合わせが警察に入っていたからだ。

何故その女性の問い合わせが警察に入っていたかという、その女性と共に宮古島観光に東京からやって来た田所治（31）という男性が、連れの女性が昨夜から行方不明になってるので、事故なんかに巻き込まれたのではないかと、問い合わせしていたのだ。

その田所に、フナクスビーチで発見された女性の遺体を見てもらったところ、その女性の身元が明らかになったというわけだ。

その女性の名前は、名取めぐみ（28）で、東京でモデルをやっている女性であった。そして、そんなめぐみと恋仲にあった田所は、二人して宮古島観光に昨日やって来た。そして、市内のホテルに泊まったのだが、その夜の八時頃から、めぐみが何処に行ったのか分からなくなっていたのだ。そして、そんなめぐみは、何故かフナクスビーチで変わり果てた姿で発見されたのである。

そんなめぐみを眼にして、田所はいかにも哀しそうな表情を浮かべた。そんな田所は、何故めぐみが死んだのか、皆目分からないと言わんばかりであった。

だが、警察は既に分かっていた。何故なら、めぐみの首には紐のようなもので絞められた鬱血痕があり、司法解剖の結果、首を絞められたことによる窒息死であるということが明らかになっていたからだ。即ち、めぐみの死は、殺しによってもたらされたのである！

その事実を告げられると、田所は呆然とした表情を浮かべた。めぐみが死んだという事実だけでも、それは田所を驚かせるに十分だったのに、そんなめぐみが何者かに殺されたなんて！正に、その事実を聞かされた田所は、茫然自失の表情を浮かべていた。

そんな田所に、めぐみの事件を捜査することになった沖縄県警の宮良正義警部（51）は、「田所さんは、名取さんとはどのような関係だったのですかね？」

と、些か興味有りげに言った。というのも、田所とめぐみは姓が違っていたので、夫婦ではないと思われた。それ故、宮良は、田所とめぐみの関係がどのようなものなのか、興味があったのだ。

そう宮良に言われると、田所は、「まあ、友達だったとでも言いましょうか」

と、宮良から眼を逸らせては、些か決まり悪そうに言った。「友達ですか。でも、一緒にホテルに宿泊される位の関係ですから、かなり親密な関係だったのでしょうかね」

と言っては、宮良は唇を歪めた。「まあ、そうですね」

と、田所は再び些か決まり悪そうに言った。

すると、宮良は小さく肯き、

「では、あなたは、将来結婚される予定になっていたのですかね？」

と、田所の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、田所は、

「いや。そこまでは何とも言えません」

と言っては、眉を顰めた。

すると、宮良は渋顔を浮かべた。というのは、一緒に宮古島旅行に来る位だから、将来結婚する予定になっていたのではないかと思っていたからだ。

それはともかく、宮良は田所をまじまじと見やっては、

「では、田所さんは、名取さんとどうして知り合われたのですかね？ 会社の同僚だったのですかね？」

と、いかにも興味有りげに言った。

「いいえ。そうではありません」

「では、どうして知り合ったのですかね？」

「まあ、ナンパしたとでも言いましょうか。飲み屋で僕が名取さんをナンパしましてね。それ以来付き合うようになりまして」

と、田所は些か決まり悪そうに言った。

「ナンパで知り合った、ですか。で、付き合うようになって、もうどれ位になるのですかね？」

「もう一年位になるでしょうかね」

「今まで二人して、旅行に行かれたことがありますかね？」

「一度、箱根旅行に行ったことがありますね。今回は二回目なんですよ」

と言っては、田所は小さく肯いた。

「なるほど。あなたたちの関係は凡そ分かりました。」

では、昨日、名取さんがいなくなった時のことから、順次説明してもらえますかね」

と言っては、宮良は眼をキラリと光らせた。

「昨日は二人で午後六時に夕食をホテルのレストランで採りました。そして、部屋に戻ったのは、午後七時頃でした。」

そして、しばらく部屋の中で寛いでいたのですが、午後七時十五分頃、名取さんは、

『少し階下に行ってくる』

と言っては、部屋を後にしたのですよ。僕たちが宿泊していたのは、六階の603室で、階下で土産物を販売してましたから、名取さんは土産物でも見に行くのかと思い、僕は特に気にはしてなかったのですが、三十分経っても戻って来ない時は、少し気になりました。

でも程なく戻って来ると思っていたのですが、流石に一時間も経過すると、気になり、ロビーに行っては探してみたのですが、何処にもいませんでした。そうかといって、この程度のことでは、警察に連絡するわけには勿論いきませんから、部屋に戻って待っていたのですが、いつまで経っても戻って来ません。

しかし、まだ警察に連絡するというところまでは行きません。それで、まだしばらく待ってみたのですが、流石に午後十時を過ぎた頃にはフロントに電話して名取さんのことを聞いてみたのですが、フロントは情報を持っていませんでした。でも、まだ、名取さんが何らの事件に巻き込まれたという確証はないわけですから、もう少し待ってみることにし、そして、夜が明けてしまったのですよ」

と、田所はいかにも疲れたような表情を浮かべては言った。

そう田所に言われ、宮良は、

「なるほど」

と言っては小さく肯いた。宮良は田所は事実を述べたと思ったからだ。

そんな宮良に、田所は更に話を続けた。

「で、朝の七時頃になって、フロントに電話をし、彼女のことを訊いてみたのですが、フロントには特に情報は入っていませんでした。それ故、僕は気になって仕方なかったのですが、午前十時頃、警察からホテルに電話が入って、彼女と思われる女性が、池間島のフナクスビーチで死体で発見されたというのですよ。それで、僕は直ちに彼女と思われる遺体が安置されている病院に行ってみたのですが、やはり、彼女だったのですよ」

と、田所はいかにも深刻そうな表情を浮かべては言った。

そう田所に説明されて、宮良は、

「なるほど」

と言っては、小さく肯いた。今の田所の説明も正しいと思ったからだ。

しかし、今の説明だけでは、何故名取めぐみが殺されたのかは、てんで明らかにはなっていない。そして、宮良たちが明らかにしなければならないのは、その点なのだ。

それで、宮良は、

「名取さんが何者かに首を絞められて殺されたのは、明らかなのですよ。つまり、先程も説明したように、名取さんを殺した犯人がいるのですよ。その点に関して、田所さんは何か思うことはないですかね？」

と、田所の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、田所は、

「それがまるで分からないのですよ。彼女が死んだことは勿論とても信じられない出来事なんです、それが殺されたなんて！ 正に悪夢としかいいようがないのですよ！」

と、いかにも深刻げな表情を浮かべては言った。

「では、田所さんは、名取さんを殺した犯人、動機に関して、全く心当たりないというわけですかね？」

と、宮良は渋面顔で言った。

「ええ。そうなんです」

と、田所はいかにも決まり悪そうに言った。

しかし、そんな馬鹿なことがあるだろうか？ 東京でモデルをやっていた名取めぐみが彼氏と共に宮古島にやって来て僅か一日目に何者かに絞殺された。このような事件が発生するわけはな

いというのが、宮良の考えであった。

それ故、田所が何か隠しているか、また、宮良たちが知らない何かが存在しているに違いないのだ。

そう思うと、宮良は小さく肯き、そして、

「名取さんは宮古島で誰かと会うことになっていたのではないですかね？」

という言葉が自ずから発せられた。その可能性は十分にあると思ったからだ。

すると、田所の言葉は詰まった。そんな田所を見て、田所には何か思うことがあるのかもしれない。

その宮良の問いに、田所は言葉を詰まらせ、なかなか言葉を発そうとはしなかった。

それで、宮良は、

「それに関して、何か思うことがあるのですかね？」

と、言った。

すると、田所は、

「何とも言えないですね」

と言っては、眉を顰めた。

「何とも言えない？ それは、どういうことなんですかね？」

宮良は納得が出来ないように言った。

すると、田所は眼を大きく見開き、

「今、思えば、妙なことがあるのですよ。というのは、彼女は何だかとても時間を気にしていたような感じがするのですよ」

と、いかにも決まり悪そうに言った。

「どうしてそう思うのですかね？」

宮良は興味有りげに言った。

「夕食を食べてる時に、とても時間を気にしていたような印象を受けたのですよ。何度も腕時計に眼をやってましてね。それで、僕は何となく妙に思っていたのですが、それに関して言及はしませんでした。

でも、早めに食事を切り上げたがってたのは事実だと思いましたね」

と言っては、田所は小さく肯いた。そんな田所は、確かに今思えば、めぐみの行動は妙であったと言わんばかりであった。

そんな田所に、宮良は、

「田所さんは、何故名取さんがそのように時間を気にしていたのか、何か心当たりはないのですかね？」

と、田所の顔をまじまじと見やっては言った。

「それが、まるで心当たりないのですよ」

と、田所はいかに決まり悪そうに言った。

すると、宮良は眉を顰め、

「しかし、名取さんが時間を気にしていたということは、誰かと会う約束をしていたのではない

ですかね？ それに関して何か心当たりないのですかね？」

と、何とか田所から何か捜査に役立つような情報を入手出来ないかと言わんばかりに言った。

すると、田所は何やら思いを巡らすかのような表情を浮かべはしたが、

「それに関して何も思うことはないのですよ」

と、いかにも決まり悪そうに言った。

「名取さんは宮古島に知人なんかいたのではないのですかね？ その知人と会う約束をしていたのではないのですかね？」

と、宮良はその可能性は有り得ると思ひ、そのように訊いた。

すると、田所は、

「そのような話を名取さんから聞いたことはないのですよ」

と、些か決まり悪そうに言った。

「田所さんが聞いたことがないだけで、実際にはいたのではないのですかね？」

と、宮良は田所の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、田所は宮良から眼を逸らせては、言葉を詰まらせた。というのは、田所はめぐみと知り合ってまだ一年程度であり、それ故、めぐみのことを何もかも知っているわけではないからだ。

それで、その思いを宮良に話した。

すると、宮良は小さく肯いた。今の田所の話からして、宮良の推理が決して現実味のない推理とは思えなかったからだ。

そんな宮良は、念の為に、田所のアリバイを確認しておくことにした。というのも、田所の説明は実は嘘で、めぐみを殺したのは、田所であった可能性はあったからだ。別れ話がこじれての男女間の殺人事件は、枚挙に暇がないからだ。そして、今回の事件もそれに該当する可能性は十分に考えられるからだ。

すると、田所は、

「その頃はホテルでじっとしていましたよ」

と、些か不貞腐れたような表情を浮かべては言った。そんな田所は、田所のアリバイを確認した宮良のことが不満であったかのようにであった。

そして、今の時点ではこれ以上田所と話をして、田所から情報を得られないと思ひ、宮良はこの辺で田所の許を去ることにした。

田所から話を聞いて、特に捜査を進展させるような情報を入手することは出来なかった。

しかし、今後の捜査方針は、田所が犯人であること、めぐみが宮古島に知人がいなかったかの二点に絞られることになった。そして、田所とめぐみの関係がどういうものであったかは、東京で捜査を進めなければならないだろう。

それ故、警視庁に捜査協力を依頼することになった。

宮古島署の宮良から捜査協力の依頼を受け、警視庁の古川真一警部補（44）が早速、田所とめぐみの仲を捜査してみることにした。

そして、めぐみの両親や友人などから話を聞いた結果、田所とめぐみの仲は良好であったという証言を少なからず受けた。それどころか、めぐみの親友であった岡本良子は、

「名取さんは田所さんと結婚するつもりであったみたいですよ」

と、神妙な表情を浮かべては言った。

「田所さんの一方的な思いではなかったのですかね？」

「そのようなことは聞いてませんでした」

と、良子は神妙な表情を浮かべては言った。

そう良子に言われ、田所犯人説は小さくなった。そう古川は思い、

「では、名取さんは宮古島に知人はいなかったのですかね？」

と言っては、眉を顰めた。

すると、良子も神妙な表情を浮かべては、

「それがですね。いたのですよ」

すると、古川は眼を大きく見開き、

「詳しく話してもらえますかね」

「実はですね。名取さんは宮古島に彼氏がいたみたいなんですよ」

そう良子に言われ、古川は眼を大きく見開きキラリと光らせた。この時点で早くも事件解決に繋がると思われる情報を入手出来たと思ったからだ。

そんな古川は眼を大きく見開いたまま、

「彼氏ですか」

と、いかに興味有りげに言った。

「ええ。そうです。名取さんは私と二人で二年前に宮古島旅行に行きました。そして、その時、私と名取さんは新城海岸でシュノーケルをやったのですが、その時に名取さんは潮に流されたのですよ。そんな名取さんのことを近くにいた男性が助けたのですよ。

つまり、その男性は、名取さんにとって命の恩人となったのですよ。

名取さんはその恩に駆られたのか、その後、一人で度々宮古島に行っては、その男性と会っていたようです。もっとも、名取さんとその男性との関係がどの程度まで行ったのかは分からない

ですが、何度も二人で会っていたことから、かなり親密な関係ではなかったと思われます。

その一方、名取さんは田所さんとも付き合うようになりました。いわば、名取さんは二人の男性と同時に付き合っていたのだと思います」

と言っては、良子は小さく肯いた。そんな良子は、めぐみが殺されたのは、その二人の男性との三角関係の繯れではないかと言わんばかりであった。

また、古川もそう思った。

それで、その思いに言及した。

すると、良子は、

「私もそうだと思います」

と言っては、小さく肯いた。

そんな良子に古川は、

「では、名取さんを殺したのは、田所さんかその宮古島の男性のどちらかだと岡本さんは思っていますかね？」

と、良子の考えを訊いた。

すると、良子は少しの間、言葉を詰まらせたが、

「私は、名取さんがその二人の男性のことをどのように思っていたのかは、正確には分かりません。でも、田所さんと結婚するとかいうような話は聞いていましたよ」

「その話は、いつ聞いたのですかね？」

「一ヶ月程前ですよ」

一ヶ月前となると、今もそう思っていた可能性が高い。となると、何故、めぐみは田所と二人して、宮古島にまで行ったのだろうか？ 古川はその点がよく分からなかった。

それで、その疑問に言及してみた。

すると、良子は、

「よく分からないですね」

と言っては、首を傾げた。

それで、この辺で良子に対する聞き込みを終え、更にめぐみの友人だった者に対して聞き込みを行ってみた。

すると、岡本良子と同様に、宮古島の彼氏に関して情報を持っていた人物が見付かった。その人物は、高校時代からめぐみの友人であったという園田園子という女性であった。園子は古川に

「その宮古島の男性は、宮古島でダイビングショップで働いていたそうですよ」

「なるほど」

「で、名取さんは一年程前までは、その男性にかなり熱を上げていましたね。年に七、八回のペースで宮古島にまで行っていましたからね。で、何処で泊まったのかは知りませんが一週間程宮古島にいたこともあるみたいですよ」

と、園子は神妙な表情を浮かべては言った。

「ということは、将来、その宮古島の男性と結婚するつもりだったのでしょうかね？」

「さあ、そこまでは知りません。でも、二人の仲がかなり親密であったことは間違いないですね」

と言っは、園子は眼を鋭く光らせた。

「ところが、名取さんには田所さんという新たな彼氏が出来てしまった」

「……」

「それで、名取さんは宮古島の彼氏との関係を終わらせようとした」

「……」

「その結果が、名取さんの死に繋がったのでしょうかね？」

と、古川はその可能性は十分にあると言わんばかりに言った。

すると、園子は渋面顔を浮かべては、

「さあ、どうでしょうかね。私では何とも言えないですね」

「では、その彼氏の姓名は分かりますかね？」

「いや。そこまでは知りません」

と、園子は言ったものの、その男性の姓名は、亡きめぐみの部屋を調べてみることにより、明らかになった。その男性は、仲宗根正弘という男性であった。

それで、古川は今までの捜査結果を宮良に伝えた。

それを受けて、宮良は早速その仲宗根正弘という男性に会って、仲宗根から話を聴いてみることになった。

仲宗根は確かに東京でモデルをやっていた美人の名取めぐみの気を引いたというだけあって、日焼けした肌に白い歯がよく似合うなかなかの好男子であった。

そんな仲宗根から、宮良は早速話を聴くことにした。

「仲宗根さんは、名取めぐみさんを知っていますよね？」

と、仲宗根の顔をまじまじと見やっては言うと、仲宗根はそう宮良から言われるのを予期していたのか、いかにも落ち着いた表情と口調で、

「ええ」

と言っては、小さく肯いた。

すると、宮良も小さく肯き、

「で、その名取さんが、先日、池間島のフナクスビーチで死体で発見されたのを知ってますよね？」

すると、仲宗根は黙って肯いた。

すると、宮良は再び小さく肯き、

「で、仲宗根さんは、その名取さんと付き合っていたとか」

そう宮良に言われても、仲宗根は何も言おうとはしなかった。そんな仲宗根は、次の宮良の言葉を待ってるかのようであった。

そんな仲宗根に、宮良は、

「で、名取さんの死は絞殺によるものでしてね。つまり、名取さんは何者かに殺され、そしてフナクスビーチに遺棄されたのですよ」

「……」

「で、仲宗根さんは名取さんの死に関して、何か心当たりないですかね？」

と、宮良は仲宗根の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、仲宗根は、

「ないですね」

と、無然とした表情で素っ気無く言った。

「そうですかね？ 名取さんは、一昨日名取さんの彼氏と宮古島にやって来ましてね。そして、市内のホテルに宿泊し、午後六時にホテル内のレストランで夕食を食べ、そして、午後七時にはホテルの部屋にいたのですが、その後、階下に行くとき連れの男性に言っただけで部屋を後にし、その後の行方が分からなくなっていたのですよ。そして、昨日の午前九時頃、池間島のフナクスビーチで遺体で浮いているのを観光客によって発見されたのですよ。

それ故、一昨日の午後七時を過ぎた頃、誰かと会ったのではないかと思われるのですよ。そして、その誰かとは、仲宗根さんではないかと思うのですよ。名取さんが宮古島で知人がいるとすれば、それは、仲宗根さんしか考えられませんからね」

と、宮良は仲宗根の顔をまじまじと見やっては言った。そんな宮良は、仲宗根に「知ってることは隠さずに話してくださいよ」と、仲宗根を諷めてるようであった。

すると、仲宗根は、

「確かに刑事さんのおっしゃる通りですよ」

と言っては小さく肯いた。だが、そんな仲宗根の表情は、いかにも決まり悪そうであった。

宮良はといえば、その仲宗根の言葉は意外であった。何故なら、仲宗根はその事実を否定すると思ったからだ。というのは、仲宗根がめぐみと会ったということ認めれば、それは仲宗根がめぐみを殺したということ認めたと同然だと思ったからだ。

それはともかく、仲宗根にそう言われると、宮良は、

「やはりそうでしたか」

と、些か納得したように肯いた。

そんな宮良に仲宗根は、

「でも、僕は名取さんを殺してはいませんよ」

と、眼を大きく見開き、宮良に訴えるかのように言った。

そう仲宗根に言われると、宮良は、

「そう言われてもねえ」

と、苦笑した。今の仲宗根の証言によって、仲宗根がめぐみ殺しの最有力容疑者であることは明らかになったのも同然であったが、そんな仲宗根にそう言われても「そうですか」と、宮良が言うわけがないからだ。

そんな仲宗根に対して、宮良は、

「じゃ、どうしてそう言えるのですかね？ その根拠を説明してくれませんかね」

と言った宮良の表情には、笑みは見られなかった。

「確かに刑事さんに言われるように、僕は一昨日の午後八時頃に名取さんと会ったのですよ」

と、眼を大きく見開き、顔をかなり紅潮させては言った。

「どうして、会ったのですかね？ 名取さんは田所さんという新たな彼氏と共に宮古島に来てたのですよ。そんな名取さんが、何故仲宗根さんと会ったのですかね？」

と、宮良は些か納得が出来ないように言った。

「それは、話せば長くなるのですが、二年前の十月に、名取さんは女友達と二人で宮古島にシュノーケルにやって来たのですよ。そして、ガイド無しで新城海岸でシュノーケルをやったのですが、潮に流されてしまってね。

で、その時に僕はたまたま近くでうちの店のお客さんを連れてダイビングの案内をしていたのですよ。

そういった状況だったのですが、名取さんの友達が、たまたま近くにいた僕に『名取さんが潮に流された』と言ったので、僕が名取さんを助け出すことに成功したのですよ。僕の救助が後一分遅ければ、名取さんは生きていなかったと思いますね」

と、仲宗根はその時を思い出すかのように、いかにも神妙な表情を浮かべては言った。

その事実は既に入手していたが、宮良はいかにも納得したように、

「なるほど」

そう宮良に言われると、仲宗根は小さく肯き、更に話を続けた。

「つまり、名取さんにとって、僕は命の恩人となったわけですよ」

「ということは、交際を申し込んだのは、名取さんの方からだったのですかね？」

「正にその通りなんですよ。

でも、僕はただ、当たり前のことをしてただけなんですよ。もっとも、僕がただの普通の人なら、名取さんを助けることは出来なかったかもしれませんが、僕はダイビングのインストラクターですからね」

と言っでは、仲宗根は小さく肯いた。そんな仲宗根は、正に当り前のことをしたまでだと言わんばかりであった。

「で、名取さんは具体的にどう交際を申し込んで来たのですかね？」

「交際を申し込んで来たと言うよりも、その事故があって三ヶ月後に名取さんは宮古島にやって来たのですよ。一人でですがね。で、その時に僕の店にやって来ては僕と会いたいと言って来たのですよ。それで、会ったのですよ。

そして、その二ヶ月後にも、また、宮古島やってきたのですよ。そして、その時にも僕に連絡を取って来ては『会いたい』と言ったのですよ。そして、その後、名取さんから電話が掛かって来るようになり、そして、僕が東京に行った時にも会いました。

そして、いつの間にやら、まあ、自然といってもいい位に、恋仲になってしまったというわけですよ」

と、仲宗根は些か顔を赤らめては言った。

そう言われ、宮良は、

「なるほど」

と言っでは、小さく肯いた。今の仲宗根の説明は真実を述べてると思ったからだ。

「で、今まで何度宮古島にやって来ては、名取さんは仲宗根さんと会ったのですかね？」

「八回ですね」

「その時の滞在期間は、どれ位ですかね？」

「三日から一週間位ではなかったですかね」

「その時に何処で泊まっていたのですかね？」

「ペンションとかホテルなんかですね」

「名取さんが宮古島にやって来た時は、毎日仲宗根さんと会っていたのですかね？」

「そうです。といっても、僕は仕事を持っていますからね。ですから、僕が仕事を終わった後、会ったり、また、休みの日は一日中会ったりしてました。もっとも、名取さんは僕が休みの日に合わせて宮古島に来てたわけですから、名取さんが宮古島に長く滞在してた時は、当然僕の休みが多かった時というわけですよ」

と、仲宗根は言っでは小さく肯いた。

「で、一昨日以前で、最後に名取さんと会ったのは、いつのことでしたかね？」

「二ヶ月前だったですね」

「その時は、名取さんは何日、宮古島にいたのですかね？」

「三日でしたね」

「そうですか。で、あなたたちの関係は結局どんな具合だったのですかね？　つまり、将来、結婚を誓い合っていたとか」

「僕はそう思っていたのですが……」

と、仲宗根は些か顔を赤らめては言った。

そんな仲宗根に、宮良は、

「でも、名取さんはそう思っていなかったのですかね？」

「いや。彼女も最初はそう思っていたみたいです。名取さんの方から僕をホテルに誘い、彼女の身体を僕に捧げましたからね」

「で、彼女の口から、結婚に言及されたことはあるのですかね？」

「それはありません。でも、宮古島に住みたいと言ったことはあります。それは間接的な言葉で、僕との結婚を仄めかしたのだと思います」

と言っては、仲宗根は小さく肯いた。

「でも、最近はそのような名取さんの心境の変化が生じたのではないのですかね？」

宮良はそう思い、そう言った。何しろ、一年前から、めぐみは田所と付き合ってるのだ。即ち、めぐみは仲宗根と付き合ってる一方、田所とも付き合っていたのだ。つまり、めぐみは二人の男と同時に付き合っていたのだ。

すると、仲宗根は眉を顰め、

「さあ、どうでしょうかね」

「じゃ、名取さんは一年程前から東京で知り合った男性と付き合っていたのですが、そのことを仲宗根さんは知ってましたかね？」

と、宮良が言うと、仲宗根は

「知ってましたよ」

と、決まり悪そうに言った。

すると、宮良は小さく肯き、

「では、一昨日午後八時頃、何処で仲宗根さんは名取さんと会ったのですかね？」

「パイナガマビーチですよ」

と、仲宗根は神妙な表情を浮かべては言った。

「パイナガマビーチですか」

「そうです。パイナガマビーチです。よく名取さんとパイナガマビーチで夕日を見ながら、語り合ったものですよ。それ故、パイナガマビーチは、僕と名取さんの思い出の場所だったのですよ」

と、仲宗根はいかにも神妙な表情を浮かべては言った。そんな仲宗根は、めぐみがこの世にいないことは、信じる事が出来ないと言わんばかりであった。

「では何分位話したのですかね？」

「十分位でしたかね」

「どんなことを話したのですかね？」

宮良は、いかにも興味有りげに言った。

「実のところ、僕は名取さんと結婚するつもりだったのですよ。

もっとも、初めからそう思っていたわけではありません。

しかし、名取さんが何度も宮古島に来ては、僕に親切にしてくれるので、その……、つまり、名取さんは僕と結婚したがってるのではないかと思ってしまい、また、僕もいつの間にか、そう思うようになって来たのですよ。

ところが、最近になって、名取さんは僕と別れたがってるということに気付いたのですよ」

と、仲宗根はいかに神妙な表情を浮かべては言った。

「どうしてそう思うようになったのですかね？」

宮良は興味有りげに言った。

「電話で『宮古島に来るのは、今回で最後になる』と言ったからですよ。その言葉を受けて、名取さんは僕と別れようとしてるのだなと、察したわけですよ。一ヵ月前のことでしたがね」

と、仲宗根は言っでは小さく肯いた。

「確かに、そのような感じですね」

と、宮良は仲宗根に相槌を打つかのように言った。

すると、仲宗根は小さく肯き、そして、

「しかし、それでは納得が出来ないのは僕の方ですよ。というのは、今まで散々僕に対して気があるような態度を示し、その結果、僕の方が名取さんに靡いてしまったのに、そうなった後、さっと僕から去ろうとしてる。何だか、僕は弄ばれたかのような感じになったのですよ。

それで、僕は納得が出来ずに、僕のその思いを名取さんに話したのですよ」

「なるほど。それで、どうなったのですかね？」

宮良は興味有りげに言った。

「すると、名取さんは、新たに好きな彼氏が出来てしまったので、どうにもならないとか言いましたね」

と、仲宗根は憮然とした表情で言った。

「そんな名取さんに、仲宗根さんはどうしたのですかね？」

「そりゃ、非難しましたよ。『散々、僕に気があるような様を見せては僕を誘惑したのに、この期に及んでさっと身を翻すなんて、僕のことを馬鹿にしてるのか』

という具合に。すると、名取さんはしきりに謝るのですよ。

そんな名取さんに僕は、『もう一回だけ会ってくれないか。そして、その時に、名取さんの新たな彼氏がどういった男なのか、近くで見たい』

と言ったのですよ。

そして、それが今回の名取さんと新たな彼氏の宮古島来島ということになったのですよ。つまり、昨日の午後零時にパイナガマビーチで、名取さんはその男と一緒に砂浜に佇み、そして、その様子を僕が遠くで眼にするという予定になっていたのですよ。その新たな彼は僕のことを知りませんし、また、僕も知りません。

それ故、名取さんが僕のことを知らない振りを装えば、その計画は成し遂げる筈だったのですよ。

で、一昨日の夜は改めて名取さんの思いを確認したのですよ。でも、名取さんの思いは変化がなかったというわけですよ」

と、仲宗根は、慚然とした表情で言った。

そんな仲宗根に、宮良は、

「ちょっと待ってくださいよ」

と言っては、眉を顰めた。

すると、仲宗根の言葉は詰まった。

そんな仲宗根に、宮良は、

「どうして仲宗根さんは名取さんにそのようなことを要求したのですかね？」

と、いかにも興味有りげに言った。

すると、仲宗根は宮良から眼を逸らせては少しの間、言葉を詰まらせたが、やがて、宮良を見やっては、

「つまり、僕は名取さんの新たな彼氏がどんな男が見定めてやろうとしたのですよ」

と、宮良に言い聞かせるかのように言った。

「見定める？ それ、どういうことですかね？」

宮良はいかにも興味有りげに言った。

「つまり名取さんは僕を捨て、その彼を選んだわけです。それ故、僕はその彼とやらに興味があったのですよ。そりゃ、その彼がどんな人物なのかは、名取さんからは凡そ聞いていたわけですが、しかし、実物を見ないことには僕は我慢出来なかったのですよ」

そう言った仲宗根は、些か興奮してるかのようにであった。

「どうして、我慢出来なかったのですかね？」

「ですから、その男が僕よりいい男なら、僕は名取さんを諦めるつもりでした。しかし、いい男でなければ、もう一度、名取さんにアタックしようとしたのですよ。つまり、その男と僕とどちらがいい男なのか、僕は見定めようとしたのですよ。僕のこの気持ち、刑事さんだった理解出来るのではないですかね？」

と、仲宗根は眼を大きく見開き、まるで燃えるような眼差しを宮良に向けた。

すると、宮良は眉を顰め、

「そりゃ、分からないことではないですか……」

と、呟くように言っては、

「で、その結果は、どうだったのですかね？」

と、いかにも興味有りげに言った。

すると、仲宗根は少しの間、眼を大きく見開き、言葉を詰まらせたが、やがて、

「ですから、その僕の目論見は実現しなかったのですよ！」

と、吐き捨てるかのように言った。

「実現しなかった？」

「そうです。ですから、先程も言ったように、それは昨日の午後零時に行なわれることになっていたのです。しかし、一昨日の夜、名取さんは僕と話した後、ホテルに戻ったと思われるのですが、僕と別れた後、一時間もしない内に何者かに殺されてしまったのですから！」

と、仲宗根は些か興奮気味に言った。

そう仲宗根に言われ、宮良は仲宗根から眼を逸らせ、言葉を詰ませた。というのは、今の仲宗根の証言から、事の真相を見極めようとしたのだ。

即ち、今の仲宗根の証言が事実なら、名取めぐみを殺した犯人は、二人しか考えられない。一人は、今、宮良の眼前にいる仲宗根であり、後一人は田所というわけだ。

動機は、仲宗根の場合はやはり、仲宗根と別れようとしためぐみのことを許せなかった。それで、事に及んだというわけだ。よくあるパターンである。更に、田所の場合は三角関係の纏れで何かの誤解などが生じ、事に及んだというわけだ。また、まだ、宮良が知らない動機が存在してるのかもしれない。

しかし、容疑者はこの二人で決まりであろう。

そう思ったものの、宮良は、

「でも、今の話を信じよと言われてもねえ」

と言って、唇を歪めた。

そんな宮良に、仲宗根は、

「しかし、これが事実なんですよ！」

と、眼を大きく見開き、顔を紅潮させては、自らの潔白を訴えた。

「しかし、名取さんは宮古島には、仲宗根さんしか、知り合いはいないのですよね？」

「そうだと思います」

「そうですよね。だったら、一体誰が名取さんを殺したというのですかね？ 名取さんの死は、何者かにロープのようなもので首を絞められたことによる窒息死なんです。車に轢かれて死亡したわけではないのですよ。それ故、名取さんに対して強い殺意があったと思われるのですよ。また、池間島のビーチで遺棄されたわけですから、その移動手段が必要なんです。それ故、宮古島居住者が犯人である可能性が高いのですよ！」

と、宮良は力強い口調で言った。

「そうとも限らないと思います。レンタカーを利用したかもしれないですからね」

と、仲宗根は宮良に反発するかのよう言った。

「それもそうですが。しかし、仲宗根さんが殺してないのなら、仲宗根さんは犯人に心当たりあるのですかね？」

と、宮良は仲宗根を睨み付けるかのよう言った。

すると、仲宗根は言葉を詰ませた。そんな仲宗根は、そのような人物に心当たりないかのようであった。

案の定、仲宗根は、

「その様な人物に心当たりないのですよ。そりゃ、その新たな彼氏に関して情報を持っていれば、その新たな彼氏が怪しいといえるかもしれませんが、生憎、その彼氏に関して僕は殆ど情報が

ありません。それ故、その新たな彼氏が怪しいと言うことすら出来ないのですよ」

と、渋面顔で言った。

そんな仲宗根を見て、宮良は仲宗根は犯人ではないと思えた。

それで、

「じゃ、仲宗根さんは、名取さんを殺してないのですね」

と、確認した。

「勿論、そうですよ！」

と、仲宗根はいかにも真剣な表情を浮かべては言った。

それで、この辺で仲宗根の許を後にすることにした。

仲宗根から話を聴いた結果、仲宗根が犯人である可能性は小さいという感触を得た。

となると、田所が犯人ということか？ しかし、めぐみは仲宗根ではなく田所を選んだのだ。その思いを田所に伝えてる筈だ。そんな田所が、めぐみを殺すということが有り得るのか？

そりゃ、まだ明らかになっていない動機が存在してるのかもしれない。それ故、田所犯人説が完全に否定出来たわけではない。

それ故、一昨日、田所のレンタカーが、ホテルの駐車場に停められていたかどうかの捜査が行われた。

すると、その結果は、白であった。即ち、めぐみの死亡推定時刻と深夜に田所が借りたレンタカーは、ホテルの駐車場に停められていたという捜査結果が出たのであった。

となると、やはり、仲宗根が犯人なのか。それで、今度は仲宗根本人ではなく、仲宗根がめぐみのことを周囲の者にどのように語っていたか、その捜査が行われることになったのだ。

すると、興味深い情報を入手するに至った。

それは、仲宗根の高校時代からの友人である安里次郎という男性から入手した情報だったが、仲宗根はめぐみではなく、元々付き合っていた彼女がいたというのだ。しかし、それは矛盾してるのではないのか？ 何しろ、仲宗根は名取めぐみとの結婚を考えていた男なのだ。

それで、宮良は再び仲宗根に会って、仲宗根から話を聴くことにした。

宮良の話に言葉を挟まずに、じっと耳を傾けていた仲宗根は、宮良の話が一通り終わっても、特に言葉を発そうとはしなかった。

それで、宮良は、

「今の話、つまり、仲宗根さんは名取さん以外にも、付き合っていた彼女がいたのですよね？」

と言っては、仲宗根の顔をまじまじと見やった。

すると、仲宗根は、

「ええ」

と、呟くように言っは、小さく肯いた。即ち、仲宗根はそれをあっさりと認めたのだ。

すると、宮良は小さく肯き、

「つまり、仲宗根さんはその彼女と名取さんを二股かけていたというわけですか」

と、興味有りげに言った。

すると、仲宗根は宮良から眼を逸らせては、少しの間、言葉を詰まらせたが、やがて、

「ええ」

と、いかにも決まり悪そうに言った。

「ということは、仲宗根さんはもし名取さんとの結婚が決まれば、その彼女をあっさりと捨てようと思っていたというわけですかね？」

と言っては宮良は眉を顰めた。

すると、仲宗根は眼を大きく見開き、

「僕は、その彼女とは、別に結婚の約束はしてませんよ！」

と、甲高い声で言った。そんな仲宗根は、今の宮良の指摘は間違っていると言わんばかりであった。

「つまり、単なる遊び友達という位のものですかね？」

「まあ、そんな感じですね」

と、仲宗根は些か決まり悪そうに言った。

「その彼女の姓名はなんといいますかね？」

「比嘉清美という名前ですよ」

「今、何をしてるのですかね？」

「特に何もしてないと思いますよ」

「家事手伝いという感じですかね？」

「まあ、そんな感じですね」

「比嘉さんとは、どうやって知り合ったのですかね？」

「高校時代の同級生ですよ」

「では、比嘉さんの親しい友人のことは知らないのですかね？」

「そこまでは知らないですね」

「仲宗根さんが卒業した高校は何処ですかね？」

「育成高校です」

そう仲宗根に言われたので、宮良は早速、育成高校の卒業生で、比嘉清美と親しかった人物を見付け出し、早速聞き込みを行なってみることにした。

すると、早々と有力な情報を入手出来た。その情報を宮良に提供したのは、仲宗根や比嘉清美と高校時代の同級生だったという山田美知という女性であった。美知は宮良の問いに対して、一比嘉さんは仲宗根君のことをとても気に入っていましたよ。

「ということは、比嘉さんは仲宗根さんとの結婚を考えていたのでしょうかね？」

一そんなことを言っていましたね。

「では、比嘉さんは最近になって、仲宗根さんに対する不満を言ってなかったのですかね？」

と、宮良が言うと、美知は

一刑事さんはどうしてそのことを知ってるのですかね？

と些か驚いたかのように言った。

すると、宮良は、

「そりゃ、我々は捜査のプロですからね」

と言っては、にやっとした。

だが、すぐに表情を元に戻した。

そんな宮良に、めぐみは、

一どうも、比嘉さんは、仲宗根君の浮気に悩んでいたかのようなですね。

「浮気ですか」

宮良はその事実を今、初めて知ったかのように言った。

「ええ。そうです。といっても、比嘉さんは仲宗根君と結婚してるわけではありませんから、浮気という表現は正しくないのですが、つまり、仲宗根君は比嘉さん以外の女性と仲が良くなってしまい、比嘉さんはそのことに悩んでいたみたいですよ。」

「ほう……。で、その女性は、どういった女性なんですかね？」

宮良はいかにも興味有りげに言った。

「何でも、本土の女性らしいですね。宮古島に泳ぎに来たらしいですが、その時に仲宗根さんと知り合ったみたいですね。」

と、淡々とした口調で言った。

宮良はその女性が、名取めぐみであることは分かっていたが、

「なるほど」

と、今、その事実を初めて知ったかのように言った。

「で、比嘉さんは、その本土の女性に、敵意をむき出しにしてなかったですかね？」

「さあ、その辺のことまでは分からないですね。」

と、美知は言ったものの、美知はその事実を知ってるのだが、宮良に隠したのかもしれない。

それはともかく、

「で、その本土の女性は、名取めぐみさんというのですが、その名取さんが先日、池間島で他殺体で発見されたのですよ。で、山田さんはそれに関して、何か思うことはありませんかね？」

「特にないですね。」

この辺で、美知への聞き込みを終えたものの、比嘉清美という女性は、捜査してみる必要はあると思った。というのは、今までめぐみを巡る仲宗根と田所との三角関係の纏ればかりを捜査していたが、仲宗根を巡るめぐみと比嘉清美との三角関係の纏れに関して、捜査してみる必要があると思ったからだ。

比嘉清美宅を訪れたのは、翌日の午前十一時のことであった。清美宅は、東洋一のビーチと言われる与那覇前浜近くにあった。

清美はおかっぱの髪が似合うとても快活な感じの女性であった。だが、可愛いという表現は出来そうであったが、美人という形容は些か無理な感じであった。

それはともかく、清美に警察手帳を見せると、清美は宮良に警戒したような視線を向けた。

そんな清美に、宮良は、

「比嘉さんに聴きたいことがあるのですがね」

と、清美の顔をまじまじと見やっては言った。

「私に聴きたいこと？」

清美は怪訝そうな表情で言った。そんな清美は、警察から話を聴かれるような覚えはないと言わんばかりであった。

そんな清美に、宮良は、

「比嘉さんは、仲宗根正弘さんと付き合っておられますよね。仲宗根正弘さんとは、ダイビングショップで、ダイビングのインストラクターをやっている方ですが」

と、宮良が言うと、清美は十秒程言葉を詰まらせたが、

「ええ」

と、眉を顰めては言った。

すると、宮良は小さく肯き、

「で、比嘉さんは仲宗根さんと高校時代から付き合っておられるようですが、比嘉さんは将来、仲宗根さんと結婚される予定なんですかね？」

と、宮良が言うと、清美は表情を強張らせては、

「とんでもない！」

と、甲高い声で言った。

すると、宮良は眉を顰めた。宮良は清美があっさりとそれを肯定すると思っていたからだ。

そんな宮良に、清美は、

「でも、刑事さんはどうしてそのようなことを私に訊くのですかね？」

そう言った清美の表情には、笑みは見られなかった。そんな清美は、そのような問いをした宮良の真意を密かに探ってるかのようであった。

すると、宮良は渋顔を浮かべては、

「比嘉さんもお存知だと思うのですが、先日、池間島のフナクスビーチで若い女性の他殺体が発見されましたね。といっても、ビーチの上で発見されたのではなく、海に浮かんでるのが発見されたのですよ」

「……」

「で、我々はその女性、つまり、東京に住んでいた名取めぐみさんの事件を捜査してるというわけですよ」

と、宮良は清美に言い聞かせるかのように言った。

「……」

「で、僕が何故比嘉さんに仲宗根さんとの間柄を訊いたのか、その理由をお分かりですかね？」

と、宮良は清美の顔をまじまじと見やっては言った。

だが、清美は何も言おうとはしなかった。

すると、宮良は眉を顰めては、

「実はですね。その名取めぐみさんは、仲宗根正弘さんと付き合っていたのですよ」

と、宮良は清美の顔をまじまじと見やっては言った。

「……」

「仲宗根正弘さんとは、無論、比嘉さんと付き合っておられた仲宗根正弘さんのことですよ」

と、宮良は清美に言い聞かせるかのように言った。

「つまり、仲宗根さんは比嘉さんと付き合っていたのと同時に、名取さんとも付き合っていたのですよ」

と言っては、小さく肯いた。

「……」

「で、それに関して、我々は捜査したところ、比嘉さんもその事実、つまり、仲宗根さんが名取さんと付き合っていたということを知っていたという情報を確認出来たのですよ」

そう言っでは、仲宗根は冷ややかな眼差しを清美に向けた。

すると、清美は開き直ったような表情を浮かべては、

「そうですか」

と、さして関心が無さそうな表情と口調で言った。

そんな清美に、宮良は、

「で、僕が何故比嘉さんに、仲宗根さんと比嘉さんの関係、更に、仲宗根さんが名取さんと付き合っていたということに言及したのか、分かりますかね？」

と、清美の顔をまじまじと見やっては言った。

すると、清美は宮良から眼を逸らせては、

「分からないですね」

と、素っ気無く言った。

「そうですか？ 僕は分かってると思うのですがね」

と、宮良は清美に冷ややかな眼差しを投げた。

「……」

「つまり、世の中には、三角関係の纏れによる事件は、多発してますからね」

と言っでは、再び冷ややかな眼差しを清美に投げた。

「ということは、刑事さんは私がお名前を取めぐみさんという人を殺したと言われるのですかね？」

」

と、清美はいかにも納得が出来ないように言った。

そんな清美に、

「そうじゃないのですかね？」

と言っては、宮良は唇を歪めた。

すると、清美は眼を大きく見開き、

「どうして私がその女性を殺さなければならないのですか？」

と、宮良の推理は話にならないと言わんばかりに言った。

「ですから、三角関係の縄れですよ」

と、宮良は清美に言い聞かせるように言った。

すると、清美は、

「馬鹿馬鹿しい」

と、吐き捨てるかのように言った。そして、

「一体、何の証拠があって、そのようなことを言うのですかね？」

そう言っては、宮良を睨み付けた。

そう清美に言われ、宮良は言葉を詰まらせた。清美の犯行を裏付ける具体的な証拠は今のところ、何も無いからだ。

それで、宮良は、

「では、十月十五日の午後八時から九時にかけて、比嘉さんは何処で何をしていましたかね？」

と、めぐみの死亡推定時刻の清美のアリバイを確認した。

すると、清美は、

「その頃は、散歩をしてましたわ」

と、眼を大きく見開いては言った。

「散歩していた？」

宮良は怪訝そうな表情を浮かべては言った。

「そうですよ。私は最近、その時間帯はよく散歩をしていますのよ」

と、清美は眼を大きく見開き、それが何か問題なのかと言わんばかりに言った。

「どの辺りを散歩していたのですかね？」

「ですから、下里通りの辺りですわ」

「そうですかね」

と宮良は渋顔を浮かべては言った。

今の清美の証言から、清美への疑いは一層高まった。つまり、散歩の最中、清美は仲宗根と会話をしてるめぐみのことを眼にしてしまい、二人の会話が終わった後、密かにめぐみの後をつけ、事に及んだのかもしれないからだ。つまり、今の清美の証言から、清美への疑いは一層高まったのだ。

すると、そんな宮良に、清美は、

「刑事さんは私のことを疑ってるようだけど、肝心なことを忘れてないかしら」

と言っては、にやっとした。だが、その笑みは何となく嫌味のある笑みであった。

「肝心なこと？ それ、どういったことですかね？」

宮良はそう言っでは、唇を歪めた。

「つまり、私は車の免許を持っていないのですよ。そんな私が、どうやって名取さんの遺体を池間島にまで運ぶことが出来るのですかね？」

そう言っでは、清美は冷ややかな眼差しを宮良に向けた。そんな清美は、まるで宮良に闘いを挑んでるかのようであった。

清美にそう言われ、宮良は言葉を詰まらせてしまった。

そんな宮良を見て、清美は薄らと笑みを浮かべた。そんな清美は、まるで戦に勝利したかのようであった。

そして、この辺で宮良は一旦、清美への捜査を中断せざるを得なくなってしまった。

宮良の勘としては、清美がめぐみを殺した可能性は十分にあると思った。何しろ、清美のアリバイは曖昧だ。しかも、めぐみの死亡推定時刻にパイナガマビーチ近くを散歩していた可能性があるのだ。

即ち、清美が下里通りかパイナガマビーチの辺りにいた時に、仲宗根とめぐみが親しげに会話を交わしてるのを見て逆上し、仲宗根とめぐみの会話が終わった後、めぐみの後を密かに尾け、人気の無い所で事に及んだというわけだ。

しかし、その推理は出鱈目な推理であった可能性が高まった。というのは、めぐみの死体が、めぐみが殺害された場所に遺棄されていたというのなら清美犯人説は有力なものとなるだろうが、めぐみの遺体は、池間島のフナクスビーチビーチに遺棄されていたのだ

もっとも、砂上に遺棄されていたのではない。海に漂っているのが発見されたのだ。

それ故、フナクスビーチビーチで遺棄されたと断定は出来ない。

しかし、パイナガマビーチ方面から、フナクスビーチまでめぐみの遺体が潮によって流されたという可能性は、まず有り得ない。

それ故、めぐみの遺体はフナクスビーチに遺棄された可能性が極めて高い。

ということは、清美が言ったように、めぐみの遺体は何者かに車でフナクスビーチビーチにまで運ばれ遺棄された可能性が極めて高いのだ！ となると、それは車の免許の無い清美では不可能となるのだ！

さて、困った。果たして、この事件は解決するのだろうか？ そう思うと、宮良は焦りを感じてしまうのだった。

しかし、やはり、悪を天がそのまま放置するという事はなかったようだ。というのは、名取めぐみの事件を解決させるような有力な情報が警察に寄せられたからだ。

その情報を警察に寄せたのは、パイナガマビーチビーチ近くに住んでいる宮里明日香という二十二歳のフリーターであった。明日香は正におどおどしたような表情をしては、宮古島署に姿を見せたのだ。

そんな明日香は、明日香が警察に証言をするのを躊躇ってるかのようであった。

そんな明日香に、宮良は、

「まあ、楽にしてくださいな」

と、明日香の緊張を解き解すかのように言った。

すると、明日香は幾分か緊張を和らげたかのようであった。

そんな明日香に、宮良は、

「で、宮里さんは十月十五日の午後八時頃、パイナガマビーチでとんでもない場面を目にしてしまったとか」

と、いかにも穏やかな表情と口調で言った。

明日香はまだ、名取めぐみの事件で重大な証言があるとかいうように、名取めぐみの名前に言及していたわけではないのだが、しかし、明日香が語った時間とか場所からして、明日香がめぐみの事件で何らかの重要な証言をするに違いないと、宮良は思っていたのだ。

それはともかく、宮良にそう言われると、明日香は、

「ええ」

と、まるで蚊の鳴くような声で言った。

「それは、どんなことですかね？」

宮良は再び明日香の緊張を解き解すかのように、いかにも穏やかな表情と口調で言った。

「十月十五日の夜の午後八時二十分頃、私はパイナガマビーチに行きました。というのは、その夜は少し蒸し暑かったので、パイナガマビーチで少し涼もうと思ったのです。

ところが、その時、とんでもない場面を目にしてしまったのですよ」

と、明日香は、今尚、その時の興奮から冷められないと言わんばかりに言った。

「とんでもない場面ですか。それは、どんな場面ですかね？」

宮良はいかにも興味有り気に言った。

「ですから、人殺しの場面をですわ」

と、明日香は眼を大きく見開き、いかにも殺気立ったかのように言った。

すると、宮良も眼を大きく見開き、

「詳しく話してもらいますか」

「パイナガマビーチの砂浜で、事件は起こりました。パイナガマビーチで女性が海に背を向けて

歩き出したのですが、そんな女性に、一人の女性がいつの間にやら背後に回ったかと思うと、ロープのようなものを首に巻きつけたのです。女性は少しの間、悲鳴のような声を上げたものの、すぐに聞こえなくなりました。女性はぐったりしたので、私は死んだと思ったのですよ」

と、明日香はいかにも重要な証言をするかのように、いかにも真剣な表情を浮かべては言った。

「ちょっと待ってくださいよ。その女性が死んだと確認出来たわけではないのですよね？」

「そりゃ、そうです。

でも、その後、男性、つまり、先程まで、その女性と話していた男性が、そのぐったりして動かなくなった女性の許に近付いて来たかと思うと、更に追い討ちを掛けるかのように、その危害を加えた女性が手にしていたロープを手にしたかと思うと、一気にそのぐったりしている女性の首に巻き付けたのですよ。いわば、とどめを刺すかのような感じでした。そして、そのぐったりとした女性を抱え込んで、その男性の車に運んで行ったのですよ」

と、明日香は正に宮良に言い聞かせるかのように言った。

その明日香の証言は、宮良にとって衝撃的なものであったが、

「でも、抱え込むようにして運んだのなら、まだ死んだとは断言は出来ないのではないですかね？」

「そりゃ、そうなんですけど……。でも、女性はぐったりしてましたからね」

と、明日香はいかにも決まり悪そうに言った。そんな明日香は、死んだと表現したのは、軽率であったかもしれないと言わんばかりであった。

しかし、宮良は宮良の言葉とは裏腹、その時点で名取めぐみは死んだと察知した。即ち、今、明日香が語った証言は、名取めぐみの事件の真相そのものであったのだ。

即ち、仲宗根とめぐみは、パイナガマビーチで、別れ話に関して、話をしていた。

すると、何故か清美が姿を見せ、めぐみを仲宗根を奪った恋敵と看做し、そんなめぐみのことを許すことが出来ず、人気のないパイナガマビーチで、めぐみの首にロープを巻き付け、殺そうとしたのだが、何故かそんな清美に仲宗根も加担し、その結果、めぐみは死んだのだ。

もっとも、その場に清美が偶然にやって来たのか、または、事前に仲宗根とめぐみがパイナガマビーチに来ることを仲宗根から聞いていたのかは分からない。

しかし、いずれにしても、清美と仲宗根がめぐみを殺し、そして、その死体の後始末を行なったのだ。めぐみの死体を池間島にまで運んだのは、無論、仲宗根の車であろう。

しかし、それを仲宗根と清美に否定されてしまえば、二人を逮捕することは出来ない。

それで、

「では、その女性の死体が運び込まれたその男性の車が何であったか、分かりますかね？」

「分かりますわ。フィットですよ。色はシルバーです。私もフィットに乗っていますから、間違える筈はありませんわ。もっとも、私のフィットは、ブルーですが」

「では、その男性と女性の顔は分かりますかね？」

「いや、そこまでは……」

と、明日香は決まり悪そうに言った。

「では、その時の男性と女性の服装とか服の色は分かりましたか？」

「それなら分かりますわ。男性は紺のジーパンと青色っぽいTシャツで、女性は黒のズボンと青のTシャツでしたわ」

その明日香の証言を受け、早速、仲宗根の車が調べられた。

すると、やはり、シルバーのフィットであった。

更に、清美がその日、散歩に出かけた時の服装を何気なく訊いてみたところ、黒のズボンと青色っぽいTシャツであったことも明らかになった。

この事実から、やはり、名取めぐみの事件は、明日香の証言通りだと看做した宮良は、まず仲宗根から話を聴くことになった。

「仲宗根さんは、十月時十五日に、パイナガマビーチで名取さんと話をした時に仲宗根さんの車でパイナガマビーチにまで来ましたかね？」

そう宮良が言うと、仲宗根は十秒程言葉を詰まらせた。そんな仲宗根は、今の宮良の問いには、答えたくないかのようであった。

だが、やがて、

「ええ」

と、蚊の鳴くような声で言った。

すると、宮良は小さく肯き、

「で、仲宗根さんはその後、パイナガマビーチで名取さんと話をしたとのことですが、名取さんとの話を終えた後、まっすぐに家に帰りましたかね？」

と、宮良が訊くと、仲宗根は即座に、

「ええ」

と言っては、小さく肯いた。

「それは間違いないですかね？」

宮良は念を押した。

すると、仲宗根は、

「間違いないですよ」

と、何故そのようなことで嘘をつかなければならないのかと言わんばかりに言った。

「では、その帰り道に、仲宗根さんの車には、仲宗根さん以外には、誰も乗っていませんかね？」

と、宮良は仲宗根の顔をまじまじと見やっては言うと、仲宗根は、

「そりゃ、当然ですよ」

と、いかにも自信有りげな表情と口調で言った。

だが、仲宗根がそう言った頃、その仲宗根の証言が出鱈目であったことが、明らかになっていた。何故なら、仲宗根宅の近所に住んでいた複数の住人の証言から、十月十五日の午後八時から九時頃に掛けて、仲宗根宅の車庫に仲宗根のフィットは見当たらなかったと証言したからだ。

この事実を野口刑事から携帯電話で報告を受けた宮良は、早速その事実を仲宗根に言った。すると、仲宗根は渋面顔を浮かべては、言葉を詰まらせた。

これによって、仲宗根は署で訊問を受けることになった。また、仲宗根の車が捜査されることになった。

仲宗根は宮良たちから、明日香の証言を話したが、しかし、仲宗根はその明日香の証言を否定し、その証言は作り話だと主張した。

だが、仲宗根の車の中から名取めぐみのものと思われる女性の長い髪が見付かり、また、血液

型が一致したことを指摘すると、もう逃れられないと観念したのか、真相を話し出した。

「確かに、その女性の証言通りなんですよ」

と、仲宗根はいかにも決まり悪そうに言った。

「つまり、比嘉さんと仲宗根さんが名取さんを殺し、名取さんの遺体を仲宗根さんの車でフナクスビーチに運んだということかい？」

宮良は些か陰しい表情を浮かべては言った。

「まあ、そういうわけなんですよ」

と、仲宗根はいかにも決まり悪そうに言った。

すると、宮良は些か納得したように、小さく肯いた。これによって、事件解決に一気に近付いたと思ったからだ。

そう思った宮良は、更に真相を明らかにしようとした。

「比嘉さんは何故、仲宗根さんと名取さんが話をしていたパイナガマビーチに現れたのかな？ 仲宗根さんが比嘉さんにそのことを事前に話していたのかい？」

と、宮良は興味有りげに言った。

すると、仲宗根は、

「いいえ」

と言って、頭を振った。

「じゃ、どういうことなんだ？」

と、宮良は些か納得が出来ないように言った。

「正に偶然なんですよ」

「偶然か」

「そうです。偶然なんですよ。僕は比嘉さんにそのようなことを言いはしませんよ。比嘉さんは僕が名取さんと付き合ってることを快く思っていないからね。そんなことを言えば、比嘉さんのことですから、僕たちの前にやって来ては、名取さんに文句を言うと思っていましたからね。いや、文句位ならいいですよ。場合によっては、危害を加えるかもしれません。

そういったことを仕出かしそうな比嘉さんですから、無論、僕は言いはしませんでした。しかし、比嘉さんは偶然にやって来たのですよ。そして、案の定、比嘉さんのズボンのベルトで名取さんの首を絞めてしまったのですよ。

そんな比嘉さんを見て、僕は逆上してしまいました。つまり、名取さんさえ、僕たちの前に現れなければ、僕と比嘉さんの間に亀裂が入るということはなかったのですよ。それに、僕のことを都合のいいように弄んだ名取さんのことを思うとつかつかとして、僕も名取さんの首を絞めてしまったのですよ。気が付いた時は、もう名取さんの息はなかったのですよ」

と、仲宗根はいかにも決まり悪そうに言った。

「なるほど。では、何故二人で、名取さんの死体を池間島にまで運んだのかな？」

宮良は興味有りげに言った。

「そりゃ、名取さんの死体を人目のつかない場所に遺棄したかったからですよ。パイナガマビーチに遺棄すれば、すぐに名取さんの事件が公になってしまいます。それは、やはり、まずかった

のですよ。

それ故、池間島の海に遺棄すれば、運が良ければ、名取さんの死を闇に葬ることが出来ると判断したのですよ」

と、仲宗根は決まり悪そうに言った。

しかし、実際にはそうならなかった。

そう思うと、仲宗根はいかにも悔しそうな表情を浮かべては、言葉を発そうとはしなかった。そんな仲宗根は、改めて今の不幸は名取めぐみによってもたらされたと言わんばかりであった……。

〈終わり〉

この作品はフィクションです。実在する人物、団体とは関係ありません。また、風景とか建造物の構造等が実際とは多少異なったものがあることをご了解ください。

## 宮古島殺人事件

<http://p.booklog.jp/book/77972>

著者：広田弦一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hirogen1/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77972>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77972>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ